

第 64 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 銀賞

創価中学校 3年

水島 優希

課題①

よりよい未来に向けてあなただったら国連の場で何を訴えたいか。

副題

広島から広げる平和の心

この夏、初めて広島平和記念公園を訪れた。原爆投下から七十九年。どこを歩いても戦争の跡は残っておらず活気に溢れた街に復興していた。その中で、ただ一つ原爆ドームだけが広島歴史と戦争の悲惨さを私たちに訴え続けている。

原爆資料館では、原子爆弾によって命を奪われた人々が被爆時に身につけていた衣服や原爆が投下された八時十五分で止まったままの時計、闘病日記などの遺品が、被爆者や遺族の言葉とともに展示されていた。生き残っても、原爆症や周囲から向けられる差別的な眼差しや態度に苦しめられた人々の様子は、私達の想像を絶するほど残酷なものだと知った。資料館内部には地球平和監視時計が設置されている。デジタルの日数表示は、一段目が広島への原爆投下からの日数を、二段目が最後の核実験からの日数を表している。新たな核実験が行われるたびに、その日数が再びゼロになる。日数表示の下にある歯車装置は、核兵器による人類破滅への刻限を示している。地球の危機的状況の深刻化により一番上の歯車の回転速度が速くなると、その力が下の歯車に順番に伝わっていく。そして、固定されている一番下の歯車が回ったとき、装置そのものも自壊する仕組みになっているのだ。この歯車の回転を止めるため、世界は核兵器廃絶に向けての話し合いを進めていかなければならないと強く感じた。

近年、被爆体験者の平均年齢が八十歳を超え、戦時下の話を本人に聞くことは難しくなっている。そんな中、体験を直接うかがう貴重な機会をいただいた。彼女は十一歳で被爆してから数十年間、自分が被爆者であることを隠し、生きてきたと言う。それでも、“未来のためになるのなら”との思いで語り始めた。講話の中で彼女が繰り返し口にしていた言葉がある。「戦争は勝っても負けても不幸です。絶対に核はいけない。戦死した人にも家族がいるからね。」彼女の語る言葉の端々から、二度と戦争を繰り返してはいけない、未来の人々には絶対に戦争を体験してほしくないという心からの願いが伝わってきた。

この二つの体験を通して、当時の悲惨な状況を知るとともに、被爆しても懸命に生きようとする広島の人々の強さを感じた。地獄のようなあの日から、もうだめだと諦めるのではなく復興に努めた人々の挑戦、そして、原爆投下の事実を忘れることなく、次世代に受け継ごうとしている人々の思いを、次は私達が受け継いでいく立場にあると気づかされた。

戦争は決して昔の話ではない。今もまだ続いている。この現状を打破するために、政府ができることは何か、それは、実際に戦争を体験した人々の思いに耳を傾け、未来の社会を平和な世界にするための解決策を被爆者たちとともに考えていくことではないだろうか。日本は唯一の被爆国として、世界のどこにも原爆を投下させないという意思を強く持つこと、そして、その変わらぬ意思を世界中に訴えていくべきである。国際的な話し合いの場で率先して核反対の立場を取っていくことができれば、それに賛同する国が必ず現れるだろう。国同士が互いに信頼し合い、武力闘争や自国の利益ばかりを優先した話し合いから、互いを尊重する対話に変えていくことが重要だ。これは政治の世界だけでなく、私たちが生きる身近な世界にも当てはまることだ。一人が小さな雫を落とせば、その波紋はやがて人々の足元に広がっていく。自分自身が最初の一雫になるという自覚を持ち行動を起こせば、地球平和監視時計の動きを必ず止めることができると信じている。私はこれから、戦争を他人事と思わずに自分のこととして学び、理解を深め、周囲の人へ伝える行動を起こしていきたい。そして、将来、世界平和に貢献するため、語学力や対話力を身につけ、文化や価値観の“違い”を尊重できる世界市民に成長していく。